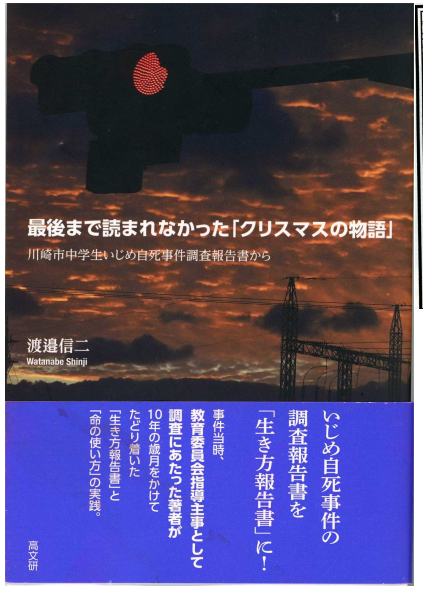
島根日日新聞

発行所　島根日日新聞社
〒693―0001　出雲市今市町743―22



【書評】渡邉信二著『最後まで読まれなかった「クリスマスの物語」』川崎市中学生いじめ自死事件調査報告書から・高文研刊

A5判　二一〇ページ　定価二、〇〇〇円＋税

酒井董美（ただよし）

著者は一九六六年（昭和四十一）東京生まれの五十五歳。昨年三月までの約二十九年間、小学校教師だった。書名からも分かるように本書は、二〇一〇年（平成二十）六月七日に起きた川崎市立南菅中学校三年生の男子生徒自死事件を取り上げたものである。

当時、著者は川崎市教育委員会学校教育部指導主事であり、この事件の調査委員だった。その真相を探るべく学校現場の関係生徒、教員、保護者、地域住民など〈の聞き取りを何度も行い、自死生徒の両親からも信頼されたからこそ本書が誕生した。

内容は次のようになっている。「はじめに」、第一部、生き方報告書を作ろう」Ⅰ生徒が死ぬということ、Ⅱ死亡報告書から生き方報告書〈①、Ⅲ死亡報告書から生き方報告書〈②、第二部、「生き／残る／人」の歩き方」、Ⅳ「生き残る人」から「生き／残る／人」へ、Ⅴ忘れがたい記憶と共に生きる、Ⅵ子どもの声、子どもの言葉と共に生きる、Ⅶ自責や自縛とは異なる生き方。この後に著者の創作である「クリスマスの物語」へのオマージュ・童話「夏の鈴と鬼の手」、「おわりに」「主な参考文献」が収められている。

著者は「はじめに」の中で、次のように述べている。

…この本は、一般市民にはほとんど読まれることはないであろう「三年男子生徒死亡に関する調査報告書について」をあらためて物語ろうと思って書いた。報告書を書いた本人が物語るのだ。こういう本はぼく自身、手に取ったことも手を伸ばしたこともない。…

確かに希有な書物ではある。行政側担当者として、真正面からこの事件と向き合い、誠意を持って対応した。自死した生徒の小学生時代から始まって、中学校同学年の生徒たちからも聞き書きを積み重ね、自死した当人が追い込まれた真相に迫っている。

さらに自死後も自死した本人の気持ちを尊重しながら、高校進学後の関係者を見つめる著者の姿に、人としての在り方を教えられるようであった。

現今の世の中を見渡せば、学校のいじめや若者の自死は決して減ってはいない。単なる行政報告書として終わらせるのではなく、多くの一般人にも関心を持つよう、祈りを込めて本書は上梓されたものであろう。

子を持つ親や教育関係者に、是非一読をお勧めしたい。

（元島根大学法文学部教授）